

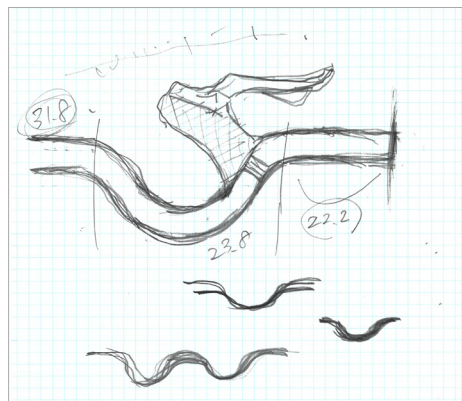
『リリースエース』 Veno ～リリースバー～



野球では“ピンチ・ヒッター”は代打、“リリース・ピッチャー”は主に救援投手です。
 ▶先に名称の話になりますが、今回取り上げる「リリースバー」は、そもそも“代役・救援”の発想で開発したハンドルだったのでリリースバーと名付けました。さすがに“ピンチバー”はどうかと思いましたが、言うならば「ピンチリリースバー」…“差し迫った状況を救援するハンドルバー”…ということになります。

▶高年の友人が「そろそろ自転車（サイクリング）辛くなってきたんだけど自分のはドロップハンドルだから仕方ないのかな〜？」と。確かに年齢によって乗車姿勢が徐々に起き上がってきた場合、ブレーキレバーが自然と遠く不安定になってくる。もしかしたらこの人はこれをきっかけに乗らなくなるかもしれない。…そんな人をシンプルな方法で救いたい。今から2年前の初夏、このような会話からそれならば“単純にアルミのハンドルを作って救えばいい”と開発を始めました。

既に多くのハンドルを設計してきた経験がありましたので、内心では秋に発表して年内には使ってもらえるかと意気込んでいました。ところが、これが奥深いと言うか難しいと言うか、大変だったのです。何しろ正式に発表出来たのが昨年秋、発売は“今月”となってしまう、ご迷惑をお掛けしているのです。

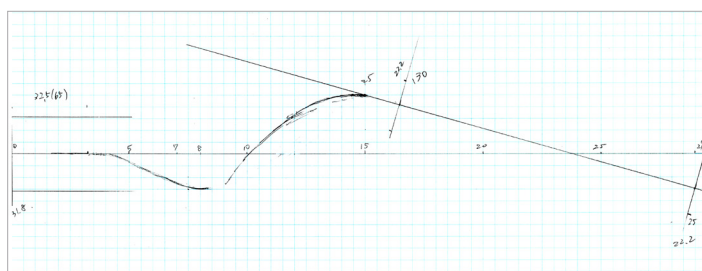


縦向きのレバーを横に使うのは邪道か…。口ひげのような形状の「マウススタッシュバー」は変速機能のないドロップハンドル用ブレーキレバーを横使いできるセミドロップ系のものです。変速機能が付き、レバー形状が湾曲している現代のレバーを横に使う…リリースバー発案の初期段階では、まだそのような想定をしきれていなかったことが、この絵からも伺えます。

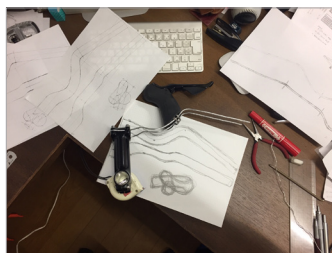
▶さてこれが如何に大変であったか、言い訳のような幼稚な表現になりますが、要するにシマノ社「STI レバー」を代表とする昨今の優れた“変速機能付きドロップハンドル用ブレーキレバー”をフラットのように使用させるのが大変難しかったのです。もはやハンドル形状は机上で描ける域のものではなく、作ってみるしかありませんでした。針金から始まり基本図面から3Dプリンターで作り、それを熱湯で低音火傷しながら曲げたりして、最適な形状を追求してこれらを繰り返すこと1年。実走可能なアルミの試作を2度作り耐久テストと試乗を重ねてようやく最終サンプルが仕上がりました。世は新型コロナの渦中、更に工場も取り組んだことのないタイプのハンドルで、工場の持つ技術力の限界まで求める複雑な形状が故に生産期間も伸びて、今月に至った次第なのです。



イメージで想定したラインを針金で作ってみます。針金をステムに仮止めして、アルミハンドルとして現実性があるのかどうかを感覚的に見極めていきます。



針金で作った感覚的ラインを実際の数値として現していきます。ここで肝心のレバー取付部のR値など、ドロップハンドルとの数値的差異が明らかになってきます。



針金にレバークランプを通してブレーキ&シフト動作の確認を行います。複雑なレバー形状と機能に対応する3次元の曲がり突き止め、3Dプリンターモデルを作るための図面を描くまでには紆余曲折があります。そうしてようやく全ての数値を入れた平面図が出来上がり、イメージが3Dによるカタチとして生まれてきます。



最初の3Dプリンターモデルです。この時点では幅が580mmでしたが、識者から「ブラケット位置ポジションがドロップハンドルポジションの380mm程度に匹敵するのが好ましい」とのアドバイスを受け、その後に620mmと広げ再度3Dを作り、曲げのR値を調整して煮詰めます。



ようやく実走可能なアルミプロトタイプが完成し耐久テストと平行して試走を繰り返し、微調整によって2度の作り替えとテストを経て、最終の形状に至りました。

センターマークの話

ブランドのVeno (ヴェノ) は上野をイメージした名称です (Vol.11 参照)。リリースバーのセンターマークは上野が立地する東京都台東区のシンボルマークをヒントにデザインしています。

